

## IEC の思い出

関 長 隆 (TC22 国内委員会 前幹事)

IEC に関わりをもつようになったのは 1972 年で、SC22E (安定化電源) 国内委員会に参加したのがきっかけである。無味乾燥な文書を読み、細かな文言にコメントをつけたりすることは、自ら希望して委員になったことではあったが正直退屈であった。1975 年ごろから変換装置標準特別委員会 (現パワーエレクトロニクス標準化委員会)、1976 年から国内の用語小委員会、1977 年の IEC 東京大会にも参加するようになり、徐々にではあるが規格の審議とはどういうものかが分かってきた。

IEC 146-2 (自励変換装置：インバータ) を基に JEC-202 (自励式半導体電力変換装置) を作成する際には、小委員会の幹事として草案の作成に当たり、これは 1978 年に発行された。IEC146-2 の修正作業を行う WG2 には代理として 3 度ほど参加したことがあったが、あらかじめ準備していたコメントの審議に参加するのが精一杯であった。

その後日本は GTO と IGBT を世界に先駆けて開発し、インバータの分野では世界でもっとも進んだ国となった。それに呼応して国内では JEC-202 の見直しを 1989 年には始めていた。その後 IEC 146-2 と 3(チョッパ)の改訂 WG が発足し各国から計 7 人のメンバーが参加してスタートしたが、コンビーナでありながら会社都合で途中辞めた人、インバータのエキスパートとはいえない人もいた。私は国内規格の審議を通して改訂すべき点を把握していたので、会議ではイニシャチブを執って進めることができた。これはその後紆余曲折を経て IEC 60146-2 として発行されたが、国内規格を IEC に反映させた一例である。

自分の体験を通して伝えたいことは以下のことである。

- 1) 一度規格案としてできた文章を変えるのは難しいので、WG の段階から参加するのがよい。問題点を把握していればたとえ英語力不足でも、特に少人数の WG では図を用いたりして相手に意を伝えることができるものである。積極的に参加すべきである。
- 2) 規格の審議は過去の経緯を知っておくことが大事である。会社では 20 年以上長期に委員会に参加できる人を選び、最初は無駄と思えても経験を踏ませることが重要である。
- 3) 企業は規格に対する重要性を認識して委員の処遇を考えて欲しい。

最後に今でも不思議に思うことがある。一字一句が大事な用語の定義を行う WG においてすら、修正意見に対しその場で英語を母国語としていない委員が文を修正して、ごく短時間のうちに作り上げてしまうことである。私は本質的なことには口を挟むことができて、文の言い回しまでは指摘できなかつた。CD の段階で英米から言葉遣いの訂正も特には出されなかつたところをみると、適切な表現にはなっていたのだろう。それに比べて、国内委員会では言葉を慎重に選び、ときには次回次々回と審議してようやく一つの文が完成することがしばしばある。これは日本語のもつ表現力の深さに起因するのかどうか、それ以上疑問を解き明かす努力はしていない。

以上